

富士宮ロータリークラブに「富士の如く」を寄贈してきました。

産業開発青年隊同窓会 会長 鈴木 浩明

令和4年10月6日木曜日12:30より行われる例会の前に贈呈式を設けていただき、富士宮ロータリークラブ31名、米山奨学生並びに関係者3名の34名に対して贈呈を行ってきました。

平成22年11月20日に行われた長澤亮太先生をしのぶ会に富士宮ロータリークラブ会員（佐野義幸様、加茂哲三様、塩川修治様）が参加されました。長澤先生は富士宮ロータリークラブに所属されていました。その時に、特に親交のあった方が参加をしてくださいました。私は、富士宮ロータリークラブに、長澤先生が亡くなり、しのぶ会を開催する旨をお伝えし、このことが縁となり富士宮ロータリークラブに入会しました。

平成30年11月24日に開催されました、産業開発青年隊同窓会総会において次期同窓会長に指名されましたので、2足の草鞋を履くことができないと考え、富士宮ロータリークラブは退会させていただきました。

「富士の如く」の中にロータリークラブのことについて記載されていますので、少々記載させていただきます。

同志の集い 長澤先生の同志が立ち上げた「天地根源の里」の道場には、30名近くの同志が集まっていた。とれたばかりの鹿肉に舌鼓をうちながら歓談。発言は天下国家のことばかり。それぞれの地域で、一隅を照らす活動の話ばかりだから愉快である。そして一つ一つが参考となり、教訓となり、励ましとなる。期せずして、同志協力の具体化がその場で成立する。おそらく百年前の幕末維新頃には、こうした議論の盛り上がり、日本列島津々浦々において盛り上がっていたのであろう。今の日本には、それが無いのだ。ある意味では日本民族の国家最大の危機は、この一点にあるのではないか。現代は、国の内外の情報がテレビ、ラジオ等のマスメディアを媒介として過剰なほどに流れ込んでくる。しかし一個の人間として受け止めた場合、その瞬間にほとんどの情報は単なるニュースとして、傍観されてしまう。もっと極端に言えば、直接自分にかかわらないことだとして受け流してしまっているのではないか。

例えば、私の身近ではロータリークラブの実相である。入会当初のころは、会員同士が期せずして、政治、経済、社会、文化の万般にわたって、その時々の問題が話題となり、それについて自然発生的に白熱した議論や意見交換があった。それはわたしの身体を張ってきた青年運動にとっても、多分に糧となり、見解を異にする内容にとっても学ぶべきところが多く、さすがロータリアンだと感心したり、誇りにさえ思ったことがある。

しかし今その熱気はない。形式化された例会が、順番を追って、きわめて円滑に流れてゆくだけである。ロータリークラブがなぜこうなったのだろうか。いやしくもロータリーは国際的、インターナショナルな組織なのだ。しかも世界人類の平和共存のためにボランティアの精神をもって活動しようと唱った最高の理念を掲げた組織なのである。

わたしも、富士山麓に青年隊のメッカを創設し、同じ九州出身の浅間大社の故東宮司と

肝胆相照らす仲となり、奉仕の精神と共鳴するところあり、東宮司の紹介でロータリーに入会したのであった。

富士宮市九州人会のつながりで意気投合する方と出会い、富士宮ロータリークラブに入会されたのではないのでしょうか。青年隊では、少林寺拳法部による奉納演武を、浅間大社で行ったり、防災訓練で、根原の中央訓練所より駆け足で浅間大社に駆け付け、防災訓練を実施し、帰りも駆け足で帰るという離れ業を行っていました。この時には、非常点呼（緊急に集合し人員確認を行う。）をおこない、隊服、隊帽、半長靴で集合。緊急のことであったため、半長靴の下は素足の者もあり、帰隊した時には、マメはつぶれ、血を噴き出していたものもいたそうです。

そのような厳しい姿を市民の方に見せることにより、建設大学校は厳しい生活を送るという印象を与えることができたのではないのでしょうか。

長澤先生は、自らの行動により、道を開くことのすばらしさ、大切さについて身をもってわたくしたち隊員に対し示されてきました。特に昭和40年代の先輩方は、北陸豪雪災害復旧、東高造成工事、宮古島災害復旧、小笠原派遣実践、沖縄派遣実践、遺骨収集派遣実践など、色濃い活動の中で、長澤先生とともに汗をかき、肌をふれあい素晴らしい教育訓練を体験されたのではないのでしょうか。その感激をぜひとも後世に伝える努力を惜しまず行動していくことが私たちに課せられた命題なのではないのでしょうか。